長野市の埋蔵文化財第48集

小島柳原遺跡群

中 俣 遺 跡 II

長野市消防局中央消防署柳原分署
移転新築事業に伴う発掘調査

1992・3

長 野 市 教 育 委 員 会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たちの先祖の長い間の知恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えるだけでなく現代の文化のあり方を見詰め直すうえでも鍵となる貴重な国民の共有財産であります。

このたび長野市消防局中央消防署柳原分署移転新築事業にともない、小島柳原遺跡群中俣遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第48集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂けければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成４年３月

長野市教育委員会

教育長　奥村　秀雄

例　　言

1　本書は長野市消防局柳原分署移転新築事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は長野市消防局の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。

3　調査地は長野市大字柳原字下返町2554－１に位置するが、周知の中俣遺跡の範囲内と理解できるため中俣遺跡として報告するものである。

4　本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集した。

5　調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。

6　本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要領は下記の通りである。

・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象から外したが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。

・遺構番号は調査時に用いた仮番号を、そのまま使用している。

・遺構の測量は（有）写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１：60の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

・遺物実測図に関しては基本的に土器１：４、土器拓影１：３に統一してあるが、その他のものについては適宜縮尺してある。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経過 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査体制 …… 1
第２章　調査地周辺の考古学的環境 …… 4
第３章　遺構と遺物 …… 7
第４章　総　　括 …… 23

挿　図　目　次

図１　調査地ならびに調査地周辺の地形① …… 2
図２　調査地ならびに調査地周辺の地形② …… 3
図３　調査地周辺遺跡分布図 …… 5
図４　調査区全測図 …… 6
図５　１号住居址実測図 …… 7
図６　１号住居址出土土器実測図 …… 9
図７　２号住居址ならびに出土土器実測図 …… 11
図８　２号住居址出土土器拓影① …… 11
図９　２号住居址出土土器拓影② …… 12
図10　３号住居址実測図 …… 13
図11　７号住居址実測図 …… 13
図12　７号住居址出土土器実測図ならびに拓影 …… 14
図13　８号住居址実測図 …… 15
図14　８号住居址出土土器実測図ならびに拓影 …… 16
図15　９号住居址実測図 …… 17
図16　９号住居址出土土器拓影 …… 17
図17　10号住居址実測図 …… 18
図18　10号住居址出土土器拓影 …… 18
図19　11号住居址実測図 …… 19
図20　１号～４号土坑実測図 …… 20
図21　２号土坑出土土器拓影 …… 20
図22　遺構外出土土器拓影 …… 22
図23　出土石器実測図 …… 23

第１章　調査経過

１　調査に至る経過

長野市柳原地籍は、地形的には千曲川によって形成された自然堤防と千曲川の氾濫原が認められる。今回の調査地周辺は、千曲川の氾濫原上に位置するものと考えられ、長沼１号幹線排水路沿いに畑地が分布するほかは、一面低湿な水田が展開する。

平成３年４月、長野市消防局は消防署・分署の適正配置計画にともない、長野市大字柳原字下返町2554-1の地籍に中央消防署柳原分署の移転新築計画を立案した。

事業予定地は周知の「小島・柳原遺跡群」の範囲外に位置するが、近年の土地区画整理事業に伴う調査成果等より、遺跡範囲が拡大することも予想されたために、長野市教育委員会は同消防局の委託を受け、事前に埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施することになった。

試掘調査は平成３年４月12日に、事業予定地内の任意の地点２箇所について実施した。両地点における土層堆積状況はおおむね一致し、現地表下１ｍ内外に存在する黒褐色粘質土層が遺物包含層と認定された。

この結果より事業面積1000㎡中、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い庁舎建設部分約380㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認された。

本調査は平成３年６月３日より開始し、７月１日まで実質14日間にわたって実施した。

２　調査体制

調査主体者　長野市教育委員会教育長　奥村　秀雄
総括責任者　市埋蔵文化財センター所長　小山　正
庶　務　係　〃　所長補佐　山中　武徳
〃　職　員　青木　厚子
調　査　係　〃　調査係長　矢口　忠良
〃　主　事　青木　和明
〃　主　事　千野　浩
〃　主　事　飯島　哲也
〃　専門員　中殿　章子
〃　専門員　横山かよ子
〃　専門主事　小松　安和
〃　専門主事　羽場　卓雄
〃　専門主事　太田　重成
調　査　員　矢口栄子　寺島孝典

参　加　者　柄沢清志　宮澤由美子　植木温子　松浦サトミ　松田美恵子　神頭幸雄　西尾千枝　家塚裕美　阿部正子　向山純子　鷲澤啓子　小松未喜子　西沢住江

整理作業参加者　岡沢治子 徳成奈於子 池田見紀 小泉ひろ美 向山純子 西尾千枝 青木善子 笠井敦子

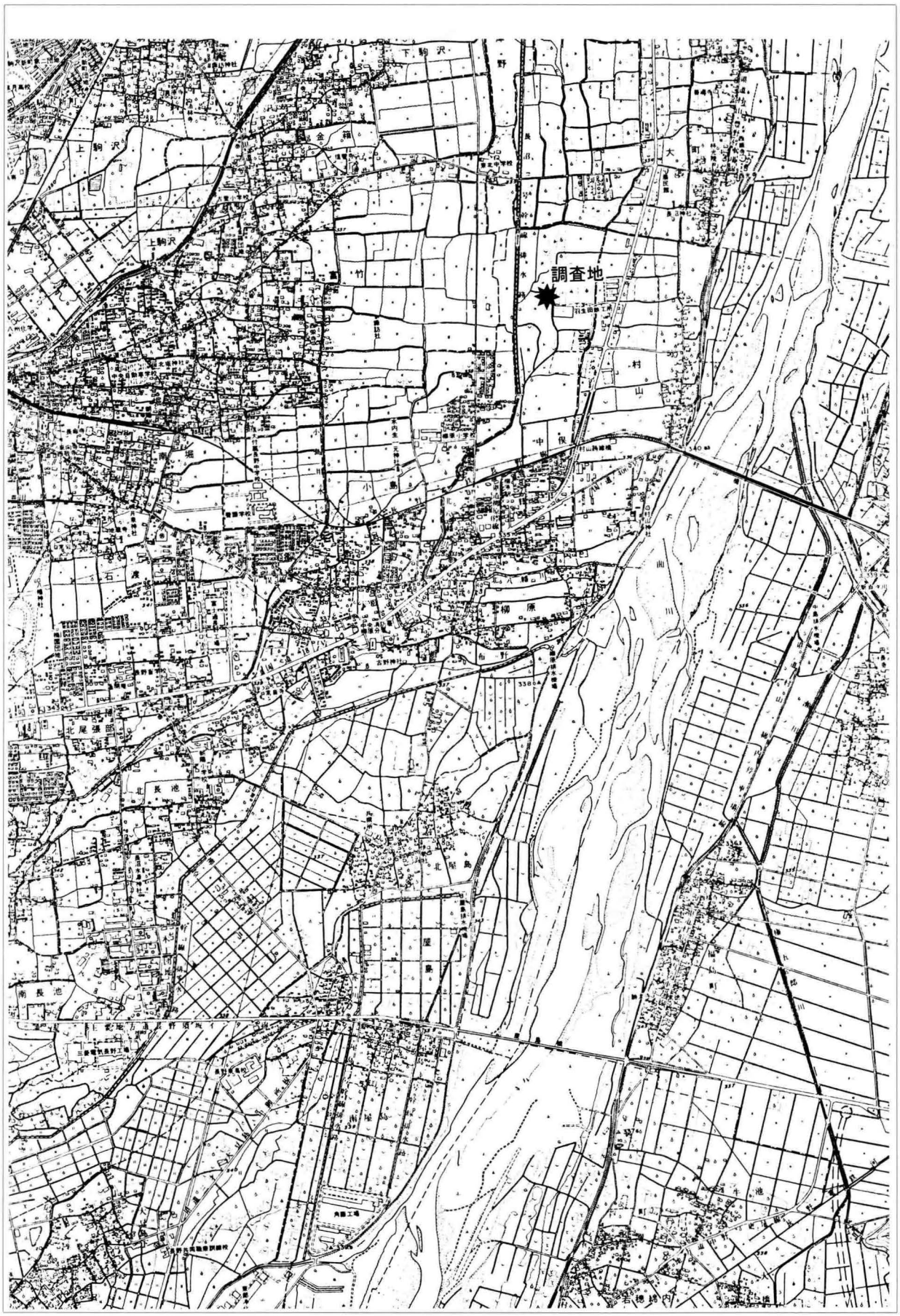


図1　調査地ならびに調査地周辺の地形①

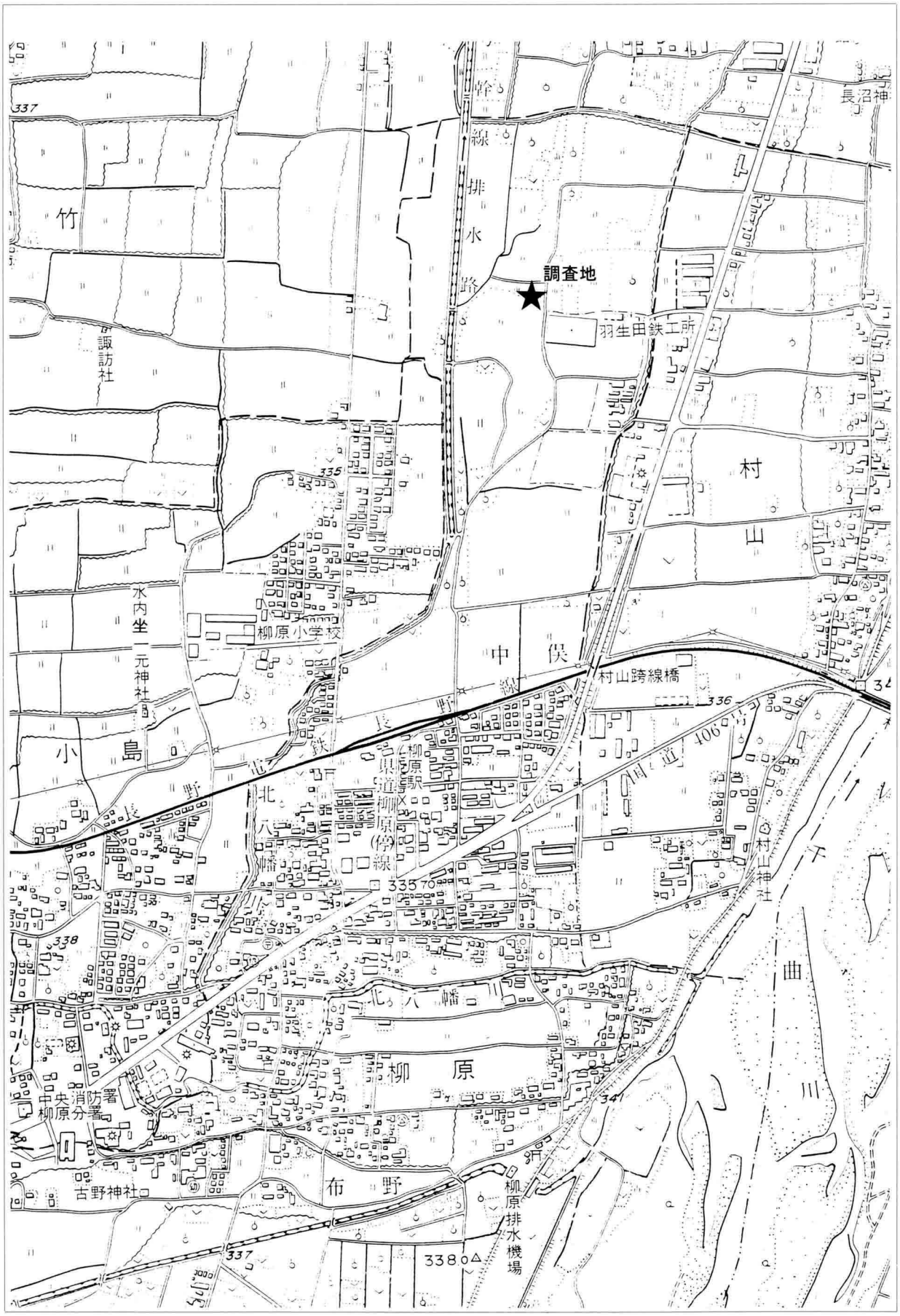


図2　調査地ならびに調査地周辺の地形②

第２章　調査地周辺の考古学的環境

長野市域犀川以北には、浅川扇状地遺跡群・小島柳原遺跡群という大きな二つの遺跡群が存在する。前者は浅川によって形成された広大な扇状地上に立地する遺跡群であり、後者は千曲川左岸に形成された自然堤防上に展開する遺跡群で、今回調査した中俣遺跡はその北東端に位置する。

以下小島柳原遺跡群を中心に正式調査を経た遺跡の概要を述べ、周辺の考古学的環境とする。

１　水内坐一元神社遺跡

市立柳原小学校新築移転事業にともない調査された遺跡で、中俣遺跡と同一の自然堤防上に立地し、将来的には同一遺跡として把握される可能性が高い。弥生時代住居址４軒、古墳時代住居址５軒、平安時代以降の柱穴群・溝址等が検出されている。弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする中俣遺跡の構造とはやや時期的にずれがあり、各時期の集落立地の変遷を考えるうえで重要と思われる。

（文献：長野市教委1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第６集）

２　小島境遺跡

弥生時代中期以降の各時代にわたる遺構が検出されており、古墳時代の周溝墓５基が検出されている。周溝墓と同時期の住居址群も検出されており、うち３軒から玉造生産関係の遺物が出土している。出土土器群の様相には、新潟県地方からの影響が色濃く現われており、またＳ字状口縁台付甕もこれに搬出しており、千曲川流域における、古墳時代初頭の土器様相の一端を示す良好な資料といえる。

（文献：青木和明1984「小島境遺跡」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所他）

３　南川向遺跡

小島柳原遺跡群の南西端付近に位置し、平安期の集落が検出されている。特徴的な遺物としては、緑釉陶器皿が出土している。

（文献：長野市教委1988『小島柳原遺跡群南川向遺跡』長野市の埋蔵文化財第25集）

４　中俣遺跡

長野市中俣土地区画整理事業にともない、昭和63年から平成２年度にかけて約5,000㎡にわたる調査を実施した。位置的には今回の調査地の南西に当たり、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落址を検出している。特に弥生時代中期後半栗林式期の集落はその規模も大きく、千曲川の河川交通を利用した交易ネットワークに組み込まれた一つの拠点集落として把握される可能性も高い。

また弥生時代終末から古墳時代初頭に比定される13号溝址からは、大量の外来系土器群の出土をみた。北陸地方を中心に東海や近江地方の影響を示す土器群も出土している。さらに遺構外からの出土ではあるが近畿地方の布留式土器も検出されている。これらは古墳出現前夜における活発な人々の交流を物語るものであり、善光寺平における古墳出現期の様相を追求するうえで、究めて重要な資料となろう。

（文献：長野市教委1981『小島柳原遺跡群中俣遺跡　浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集）

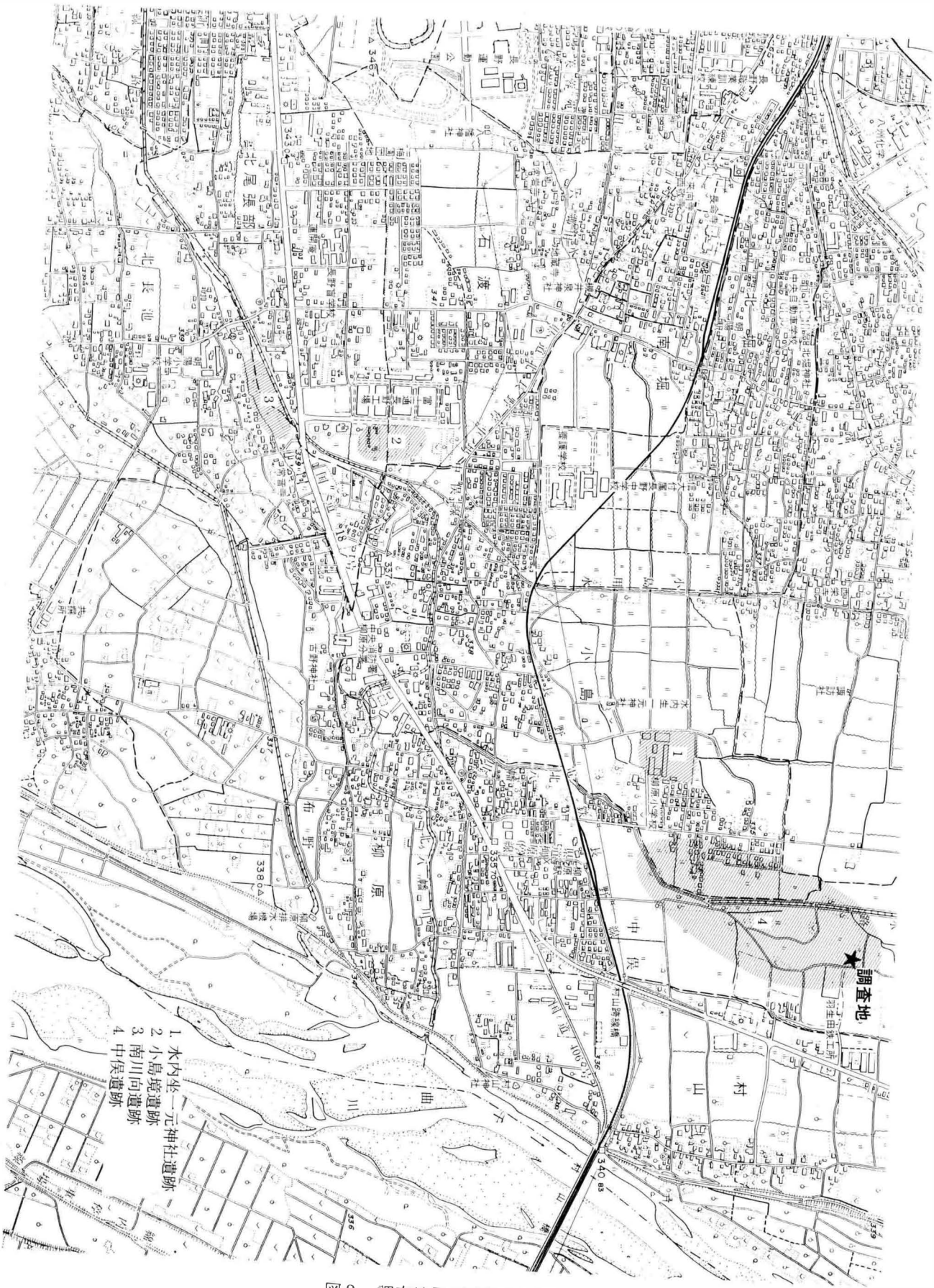


図3　調査地周辺遺跡分布図

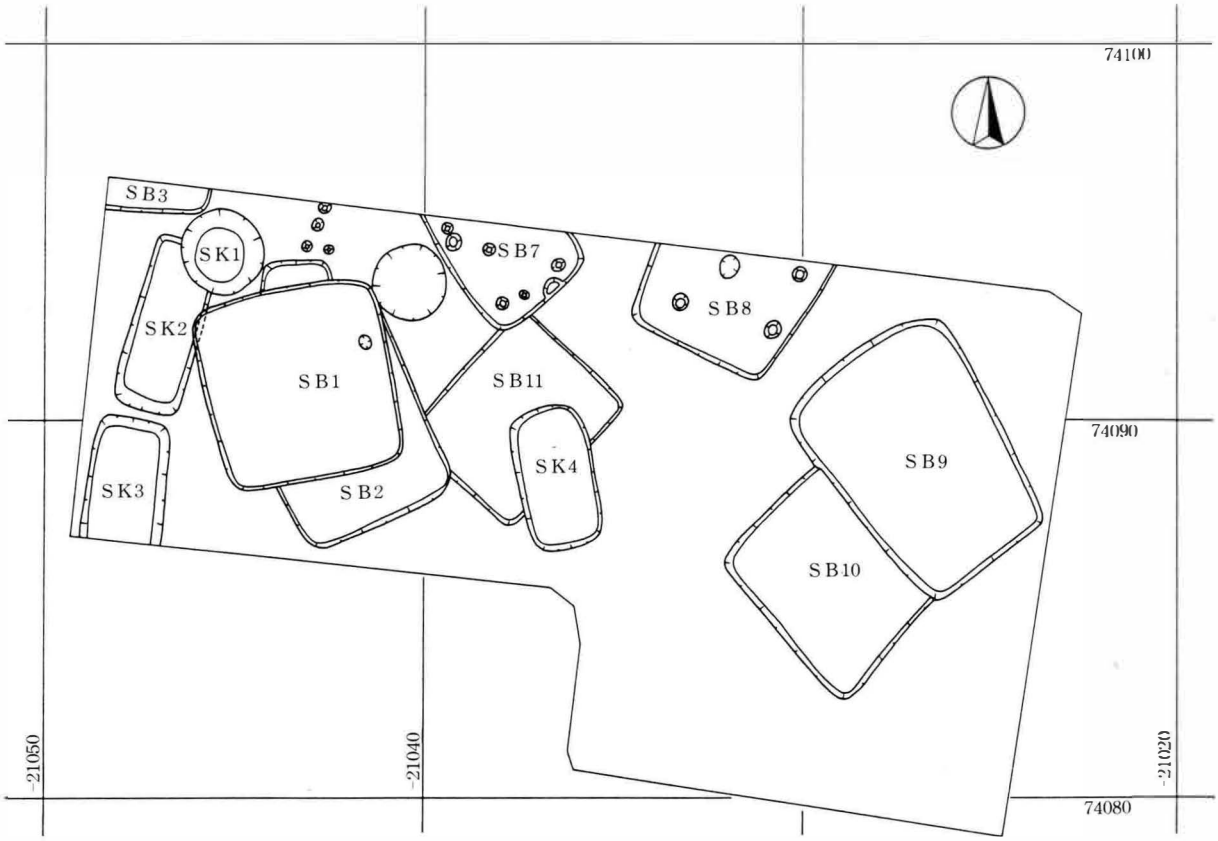


図４　調査区全測図（１：200）

調査区全景

第３章　遺構と遺物

１号住居址

調査区西側に検出された古墳時代後期の住居址である。２号住居址を切って構築される。

平面プランは一辺約5,00ｍほどの隅丸方形住居址である。柱穴は多数検出されているが、掘り込み規模や位置関係より明確に本住居址に伴う主柱穴は確認されていない。床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻で明瞭なものであった。北壁中央付近に炭化物がやや集中して検出されたが、カマドは確認されなかった。住居址中央～南西にかけての床面上より、炭化材が検出されているが、床面や壁面には焼けた痕跡は認められなかった。この炭化材の上面より比較的多量の完形土器が出土している。須恵器短頸壷（１）は陶邑編年のⅡ型式２～３段階に併行するものと考えられ、６世紀第２～３四半期といった年代幅の中で考えられよう。また南西壁際の床面より若干浮いた状況で、長径20㎝ほどの河原石の集積が検出されている。

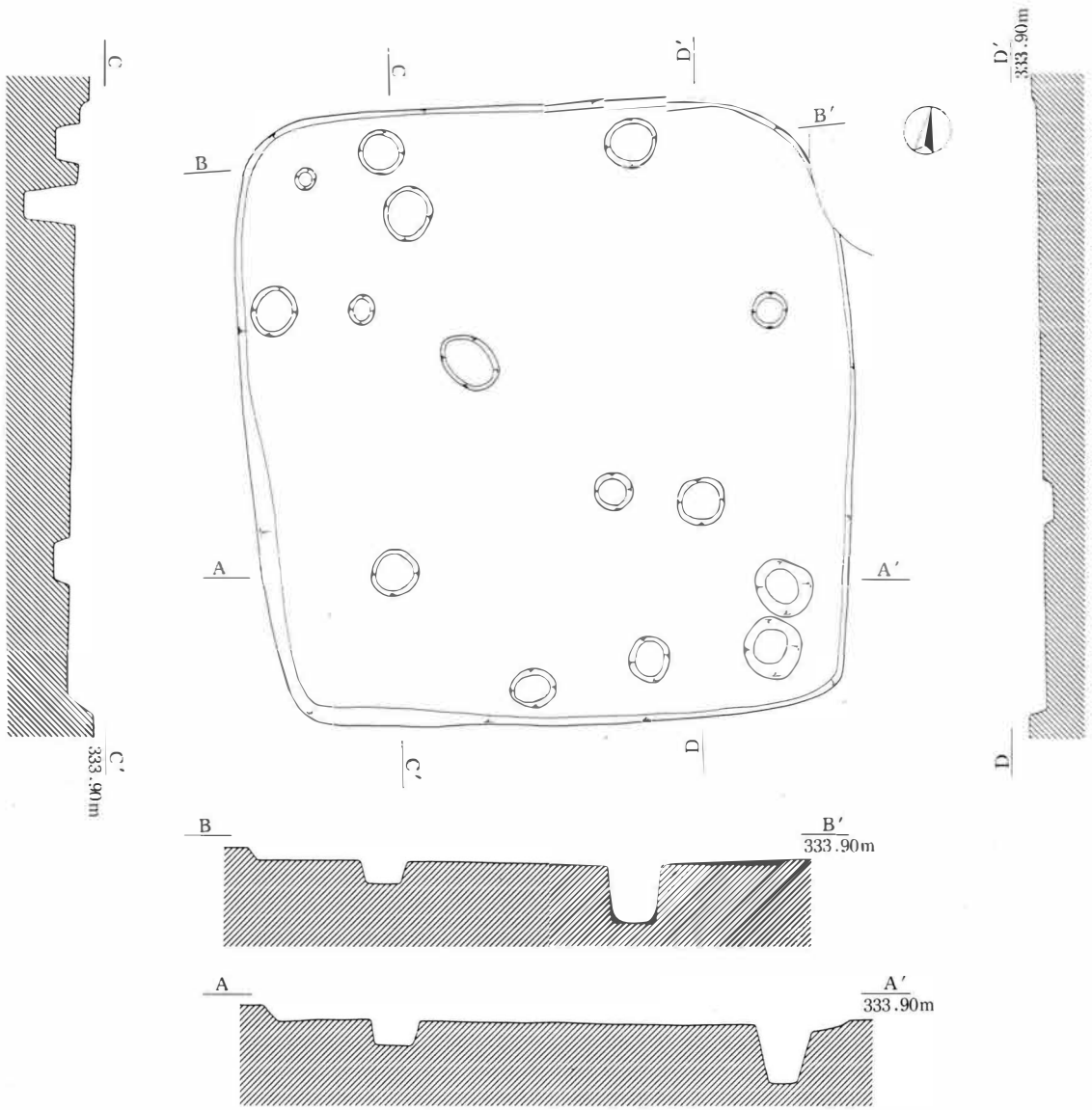
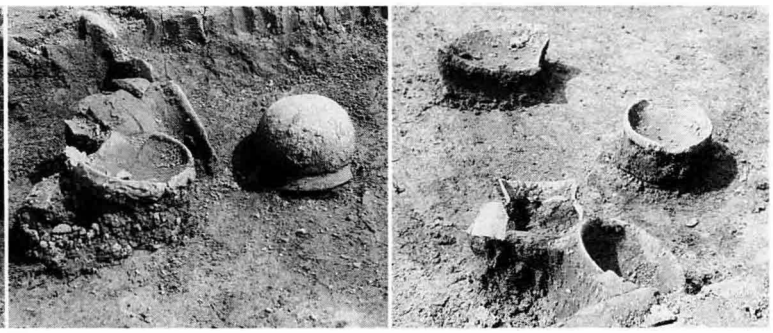


図５　１号住居址実測図

1 号住居址・炭化物・遺物出土状況

1 号住居址

集　石



土器出土状況

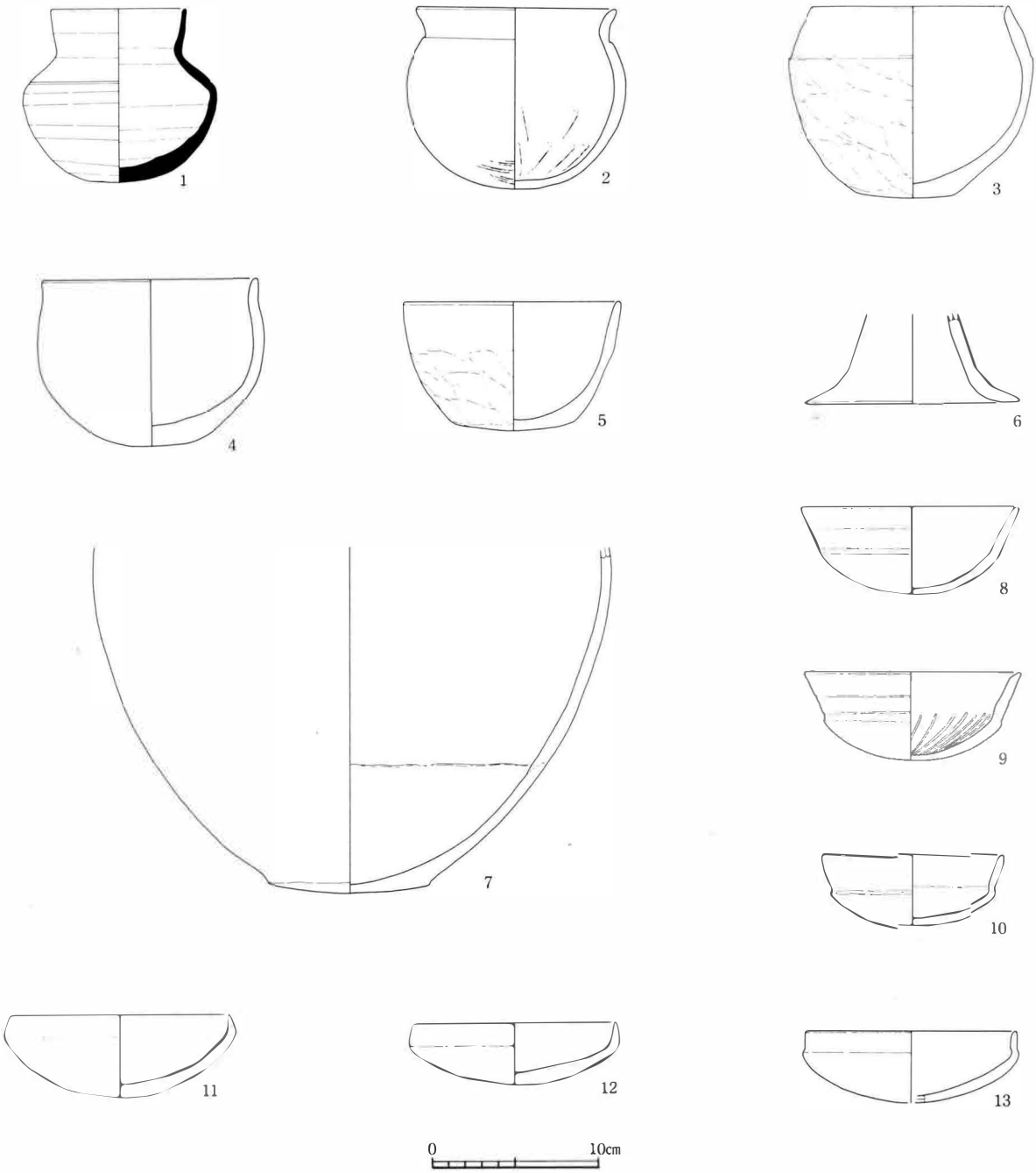
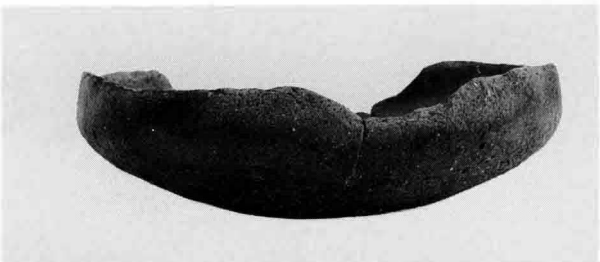
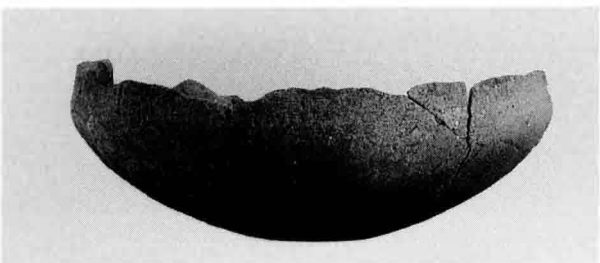


図6　1号住居址出土土器実測図

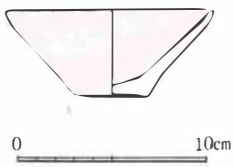
1 号住居址出土土器

２号住居址

調査区西側に位置する住居址で、北側の大半を１号住居址に切られ、詳細は不明な部分が多い。

平面プランは短辺約4,40ｍほどの隅丸長方形住居址と考えられる。検出された部分の床面は全体に固く締まっており、比較的明瞭なものであった。主柱穴配置は不明である。南側壁際に検出されたＰ１・Ｐ２は入り口施設に関連する２個一対の柱穴である可能性が高い。

出土土器で実測し得るものは小型の鉢のみであるが比較的多量の破片が出土している。



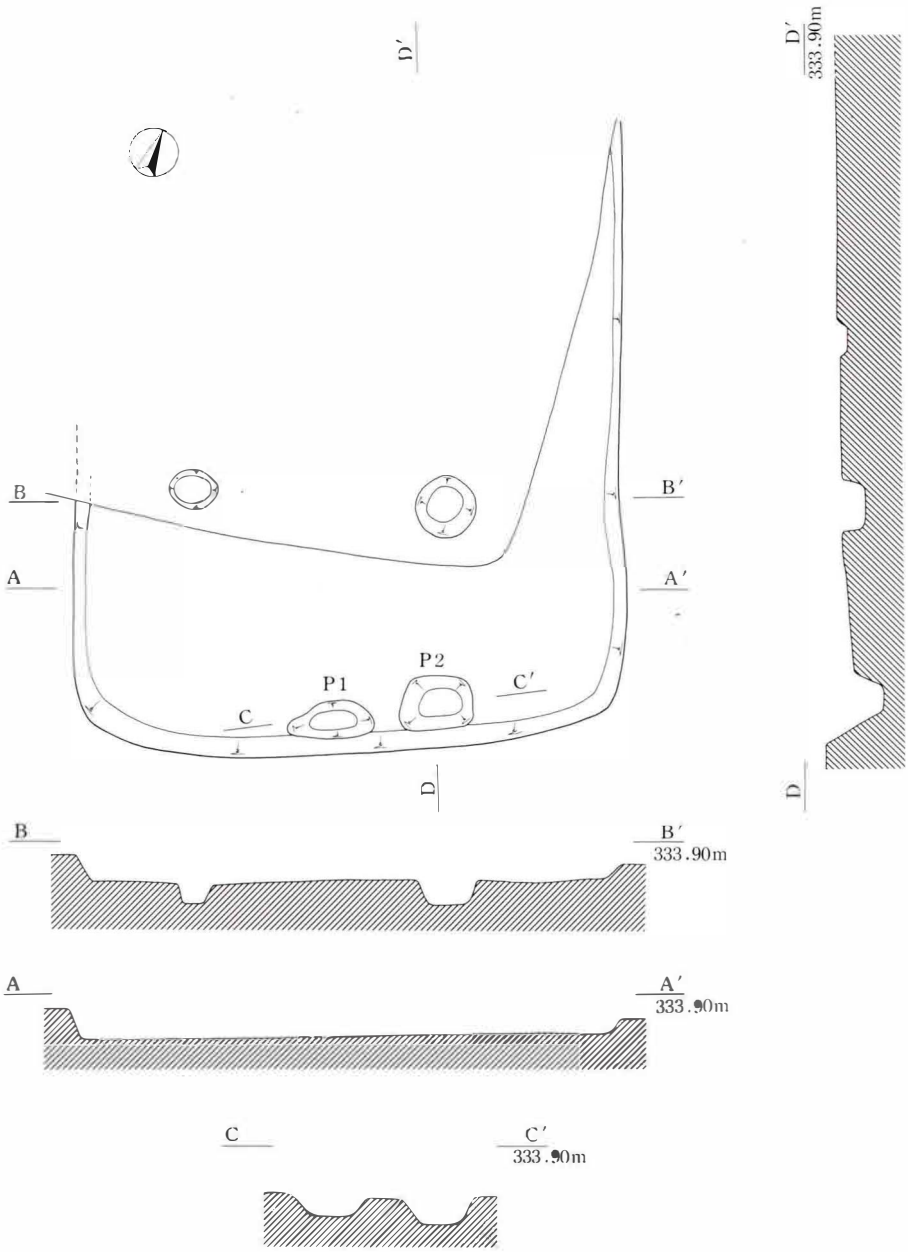


図７　２号住居址ならびに出土土器実測図

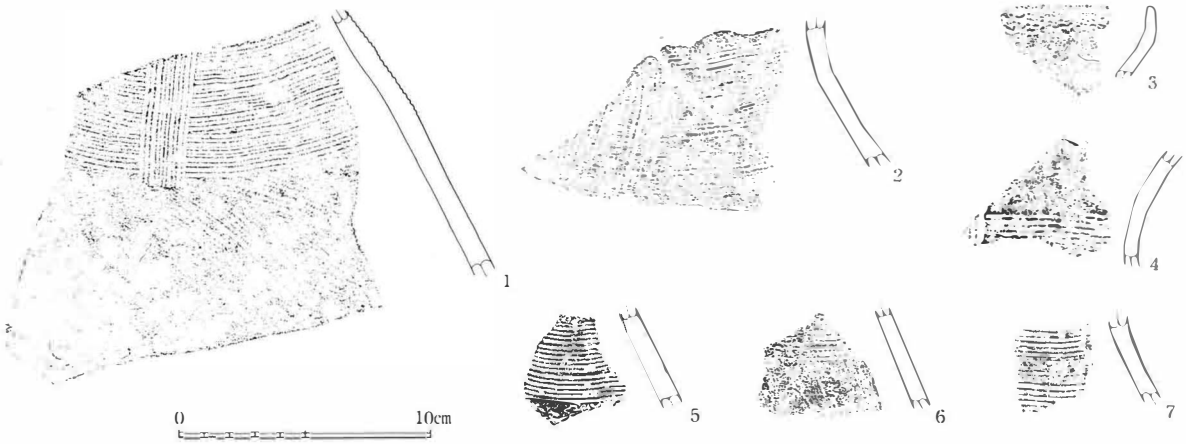


図８　２号住居址出土土器拓影①

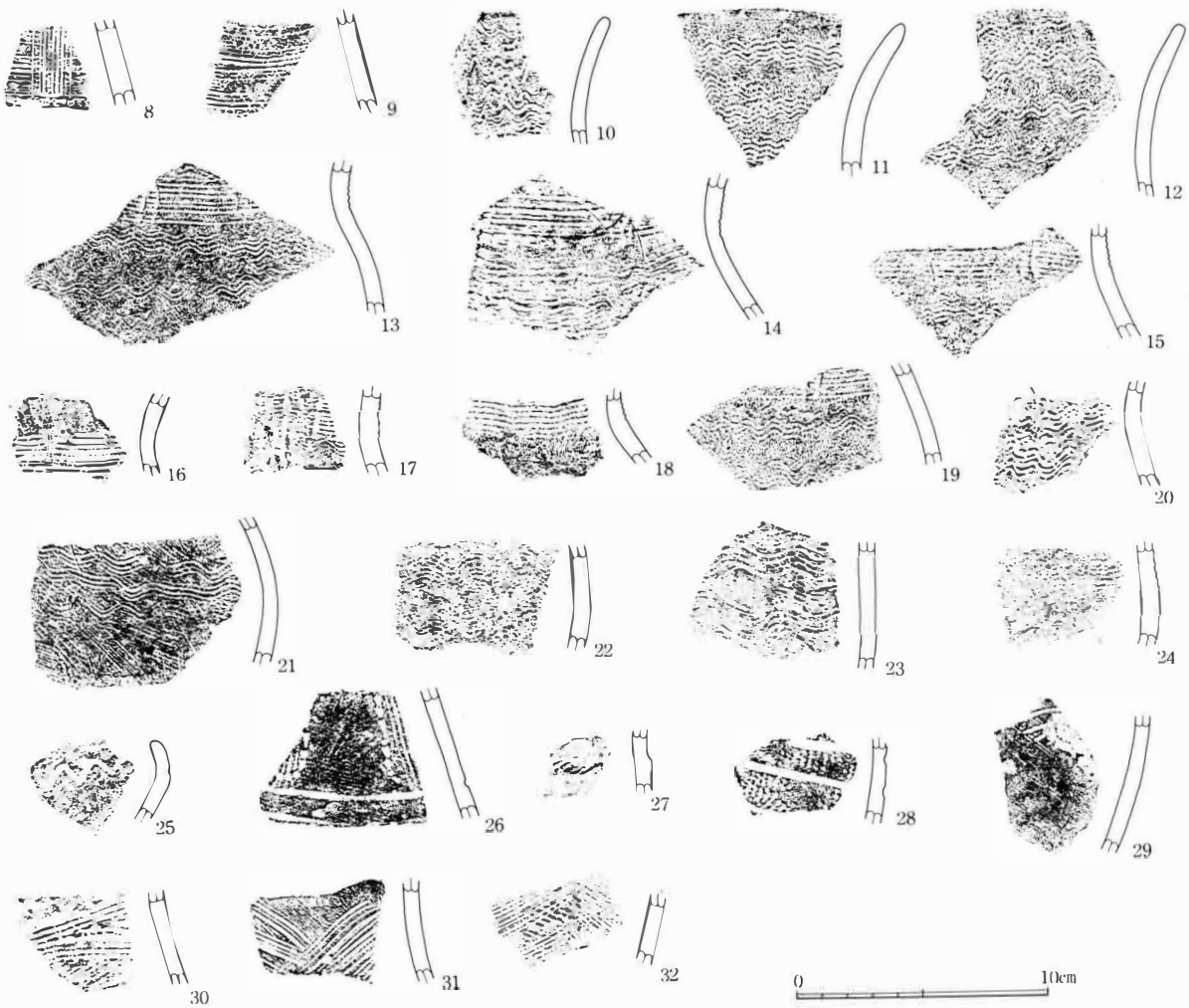


図９　２号住居址出土土器拓影②

２号住居址

３号住居址

調査区西北端で検出された住居址で、大半が調査区外となり詳細は不明といわざるをえない。出土土器で図示し得るものはないが、その様相から弥生時代後期箱清水式期の住居址と考えられる。住居址の平面プランは不明だが隅丸長方形の住居址が予想されよう。確認面からの堀り込みは平均20cm程で、床面は比較的締まっており明瞭であった。

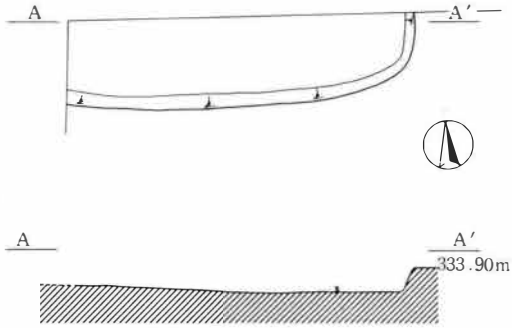
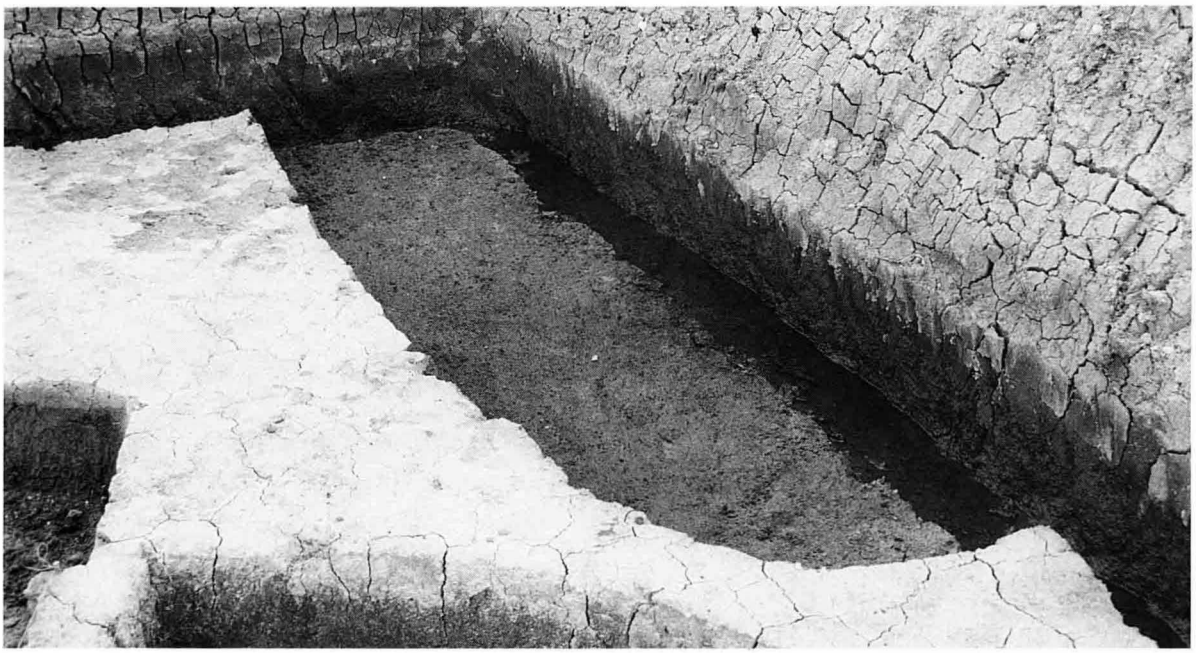


図10　３号住居址実測図（1：60）



３号住居址

７号住居址

調査区中央北端に検出された住居址で、約1/2が調査区外となる。

平面プランは短辺約3.20ｍほどのやや小型の隅丸長方形住居址が予想される。主柱穴はＰ１～Ｐ３で４本長方形の主柱穴配列が考えられる。Ｐ４は入り口施設に関連する柱穴で、Ｐ５～Ｐ７は支柱と考えられる。

床面は全体に固く締まっており明瞭なものであった。

出土土器の様相から弥生時代後期箱清水式期の住居址ととらえられる。

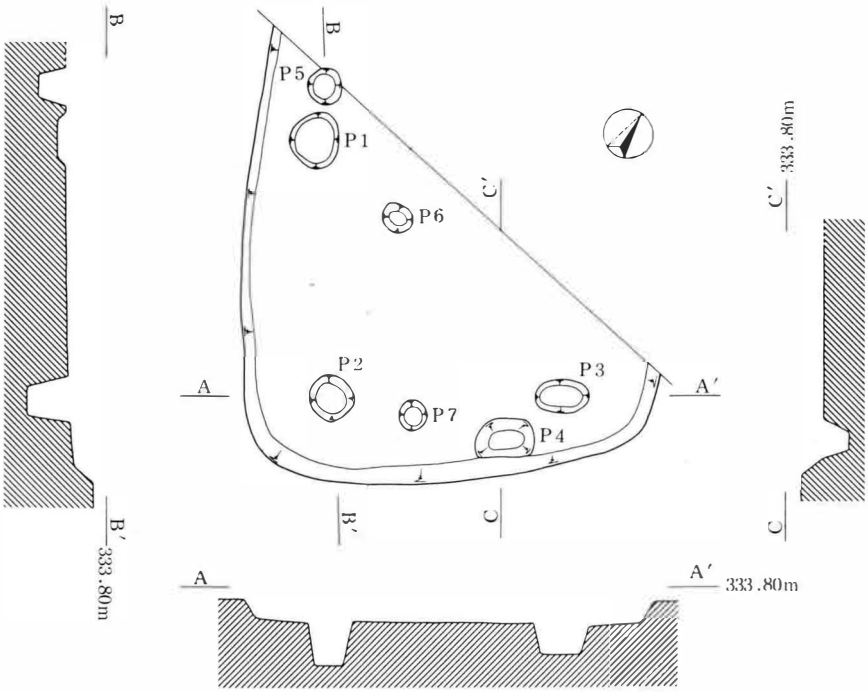


図11　７号住居址実測図(1：60)

7 号住居址

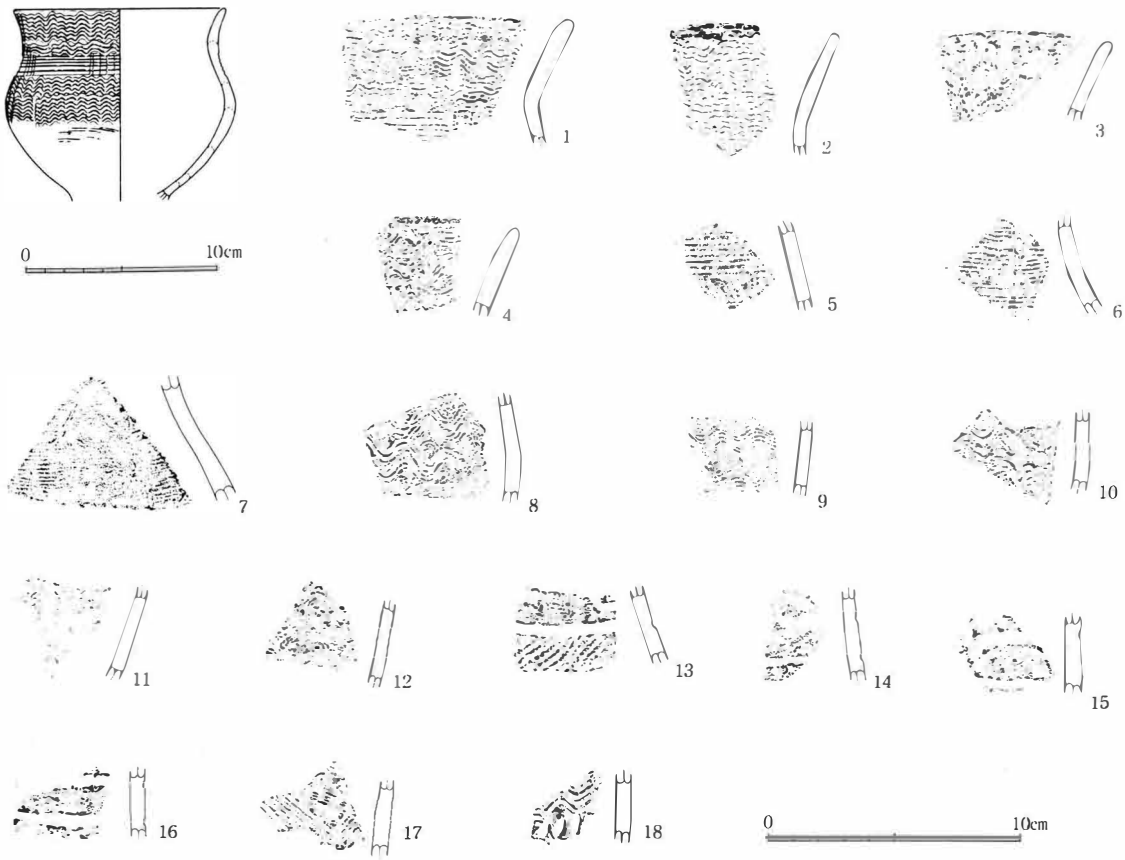


図12　7 号住居址出土土器実測図ならびに拓影

８号住居址

調査区中央北端にて検出された住居址で、1/3ほどが調査区外となる。

平面プランは短辺約4,00mほどの隅丸長方形もしくは隅丸方形住居址が予想される。

主柱穴はＰ１～Ｐ３が検出されており４本方形の配列が予想されるが、位置的にやや不整である。

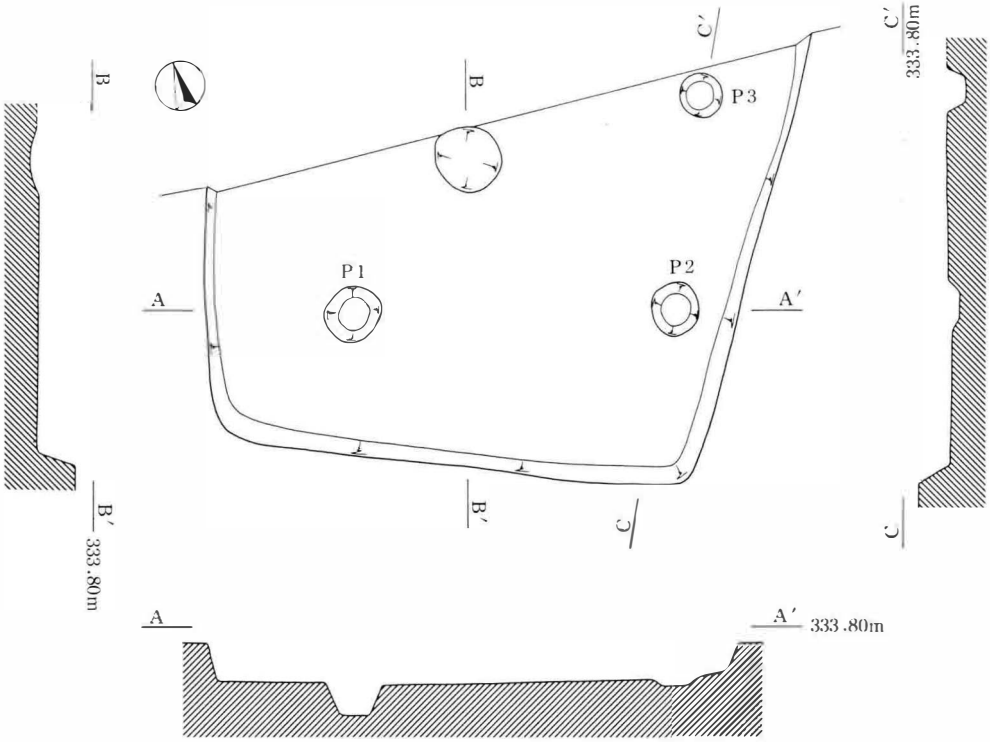


図13　８号住居址実測図(1：60)

奥壁側柱穴間よりの住居址中央部分に炉址が検出されている。径約50cmほどの地床炉で、深さ５cmほどである。出土土器の様相からは、弥生時代後期箱清水式期の住居址と考えられるが、炉の位置からはやや後出的な様相がうかがわれる。

８号住居址

図14　8号住居址出土土器実測図ならびに拓影

９号住居址

調査区東側で検出されたもので、10号住居址を切って構築される。平面プランは6.60×4.60ほどのやや不整な隅丸長方形を呈する。床面は全体に軟弱で非常に不明瞭なものでありまた柱穴等も確認されていない。炉址等も存在せず、本遺構を住居址とする積極的な根拠は存在しない。弥生中期栗林式～後期箱清水式の破片が出土している。

９号住居址

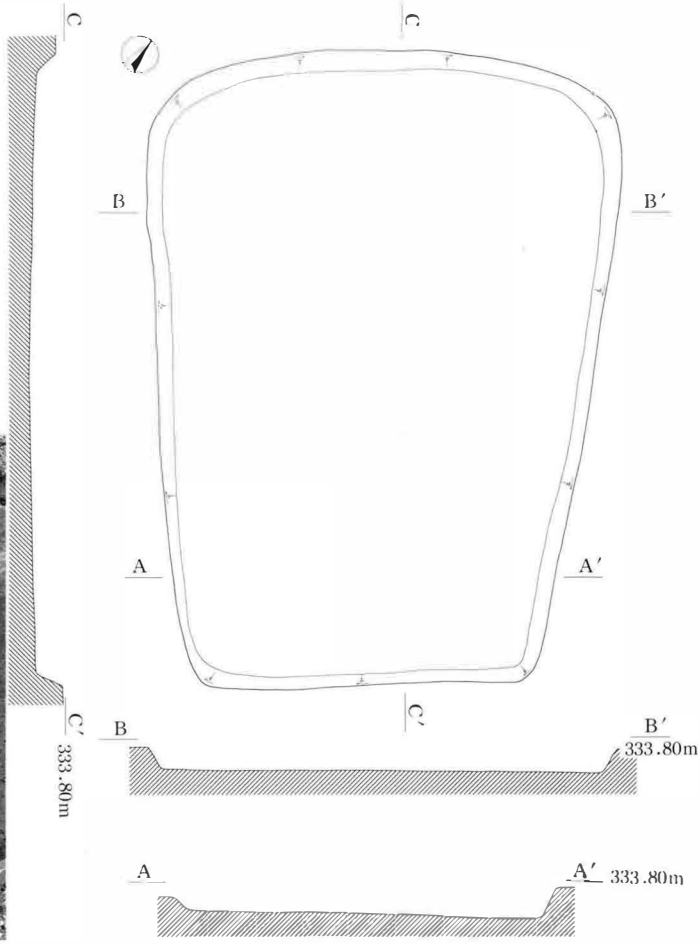


図15　９号住居址実測図(1：80)

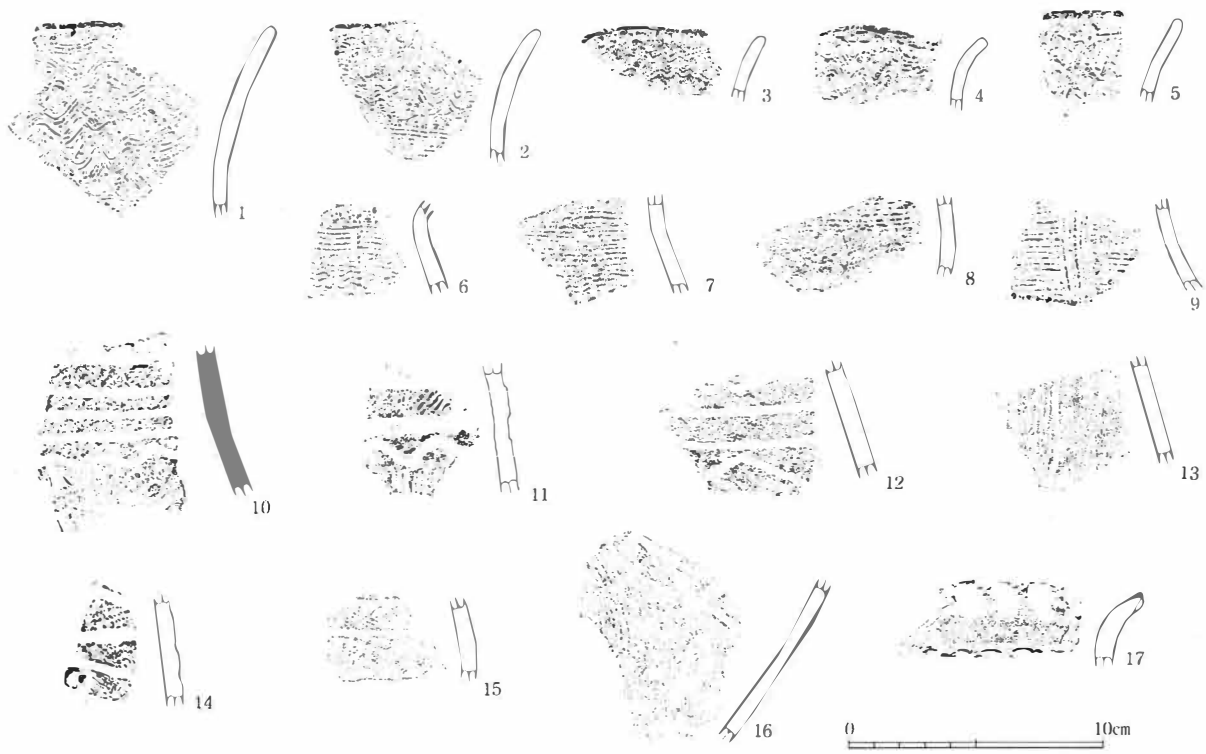


図16　９号住居址出土土器拓影

10号住居址

調査区東側にて検出されたもので、9号住居址に東側を切られる。平面プランは長辺約5.00mほどの隅丸長方形もしくは隅丸方形住居址と考えられる。炉、柱穴等検出されていないが、床面は全体に固く締まっており、比較的明瞭であった。弥生時代中期～後期の土器破片が出土している。

10号住居址

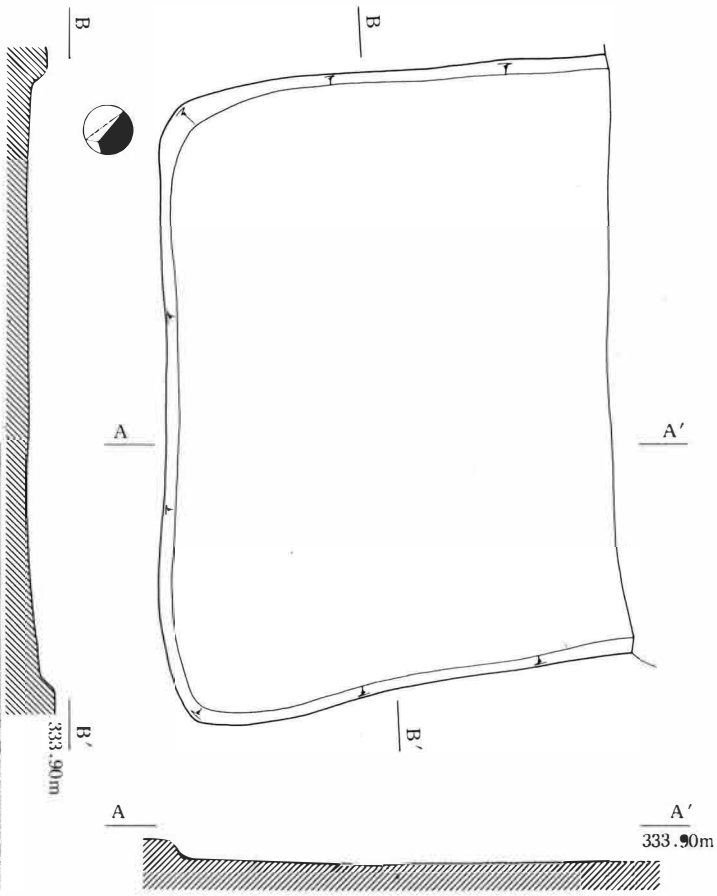


図17　10号住居址実測図(1：60)

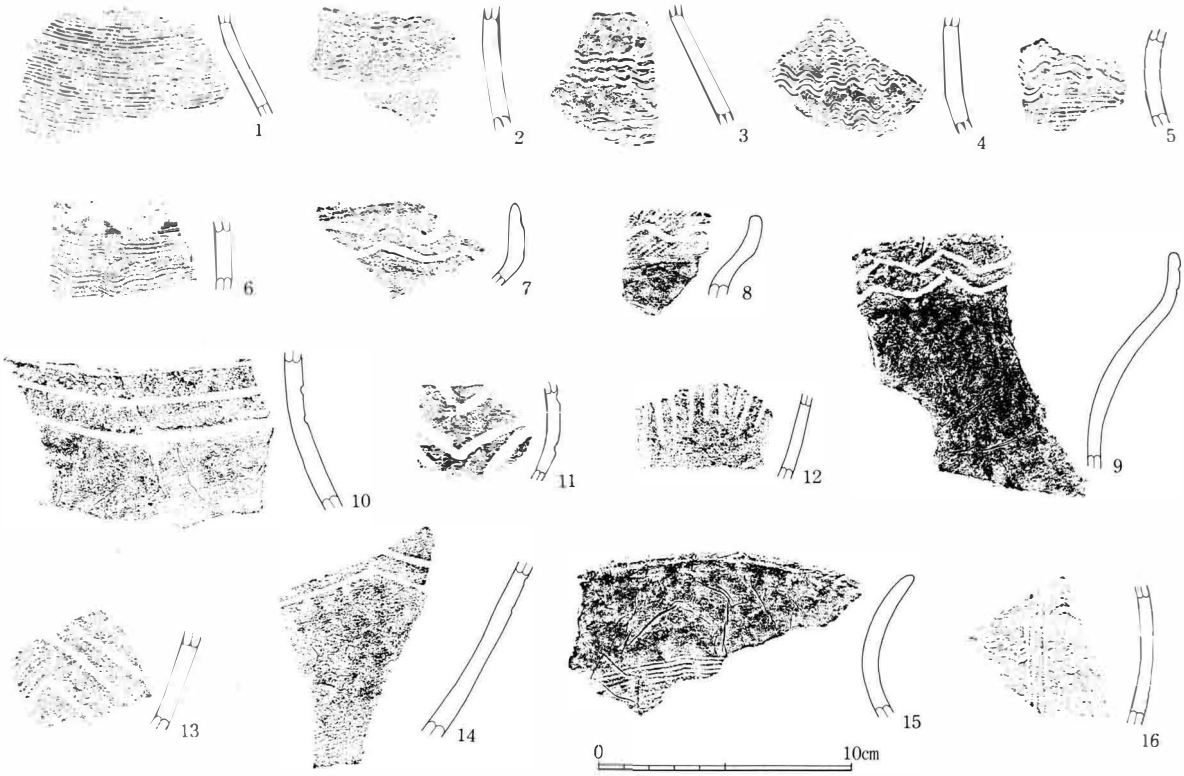
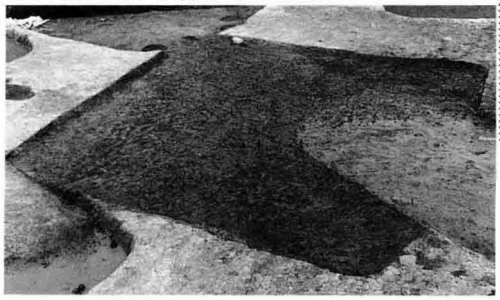


図18　10号住居址出土土器拓影

11号住居址

調査区ほぼ中央に検出された住居址で、２号住居址ならびに４号土坑に切られる。

平面プランは一辺約4.40mほどのやや不整な隅丸方形を呈する。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。また柱穴、炉址なども確認されず、本遺構を住居址と認定する積極的な根拠は存在しない。覆土内より弥生時代中期～後期の土器破片が出土しているが図示し得るものはない。



11号住居址

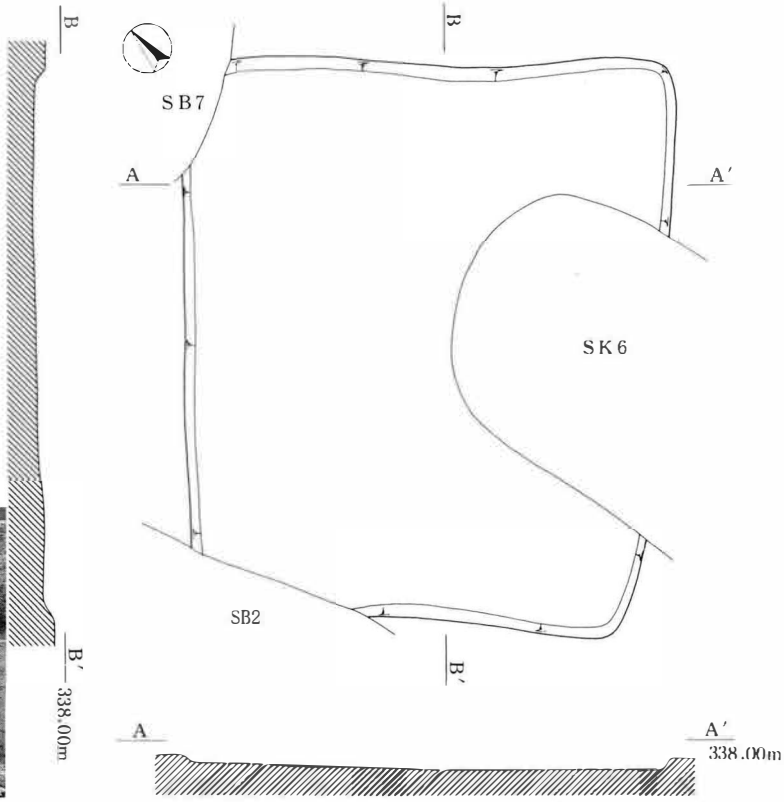


図19　11号住居址実測図(1：60)

１号土坑

調査区北西端付近に検出されたもので、２号土坑を切って構築されている。確認面での平面プランは2.10×2.00mほどのやや不整な円形を呈する。坑底面での幅は約1.40mで、断面逆台形を呈する。深さは平均40cm程である。覆土内より弥生時代中期栗林式期の土地破片が若干出土している。

２号土坑

調査区北西端付近にて検出されたもので、北側を２号土坑に、東側を１号住居址に切られる。平面プランは短軸1.90m、長軸4.40mの隅丸長方形を呈し、深さは平均20cm程である。内部より柱穴・炉址等検出されなかったが、底面は中央部を中心にかなり固く締まっていた。覆土内より弥生時代中期～後期にかけての土器破片が若干出土している。

３号土坑

２号土坑のすぐ南側にて検出されたもので、南側1/2程は調査区外となる。平面プランは短軸2.10mほどの隅丸長方形と考えられ、形状ならびに性格は２号土坑と同様のものと考えられる。２号土坑同様底部は中央部を中心にかなり固く締まっていた。覆土内より弥生土器の小破片が若干出土している。

４号土坑

調査区ほぼ中央付近に検出されたもので、11号住居址を切って構築される。2.10×3.90ほどのやや不整な隅丸長方形を呈し、深さは平均15cm程である。出土土器はなく時期等詳細は不明である。

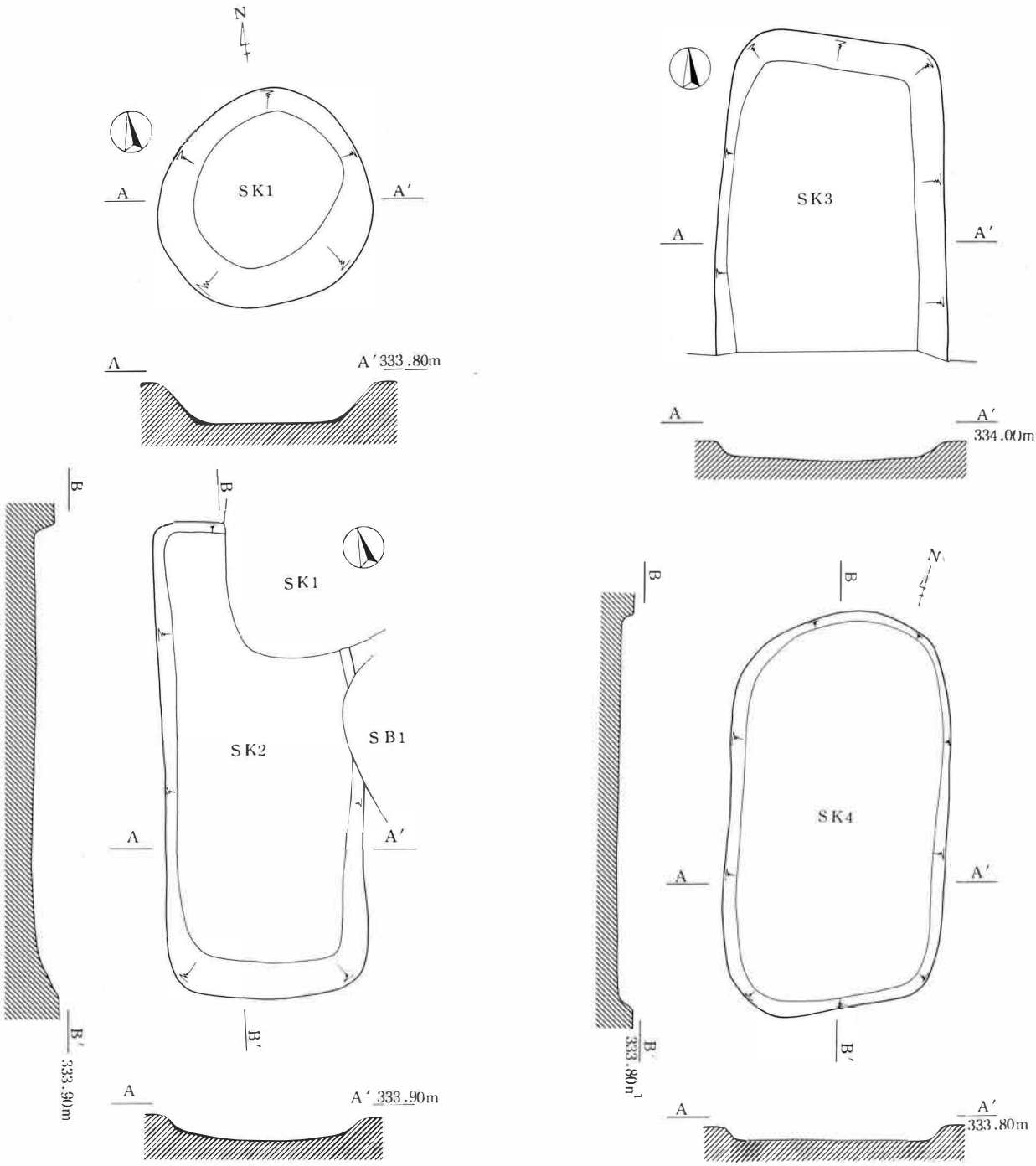


図20　1号～4号土坑実測図(1：60)

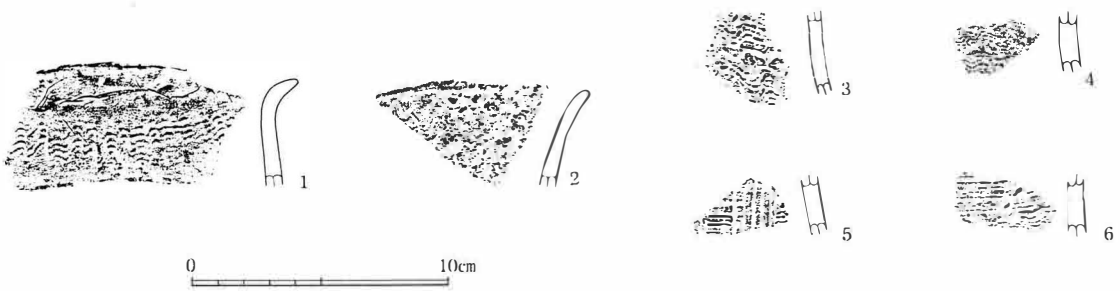
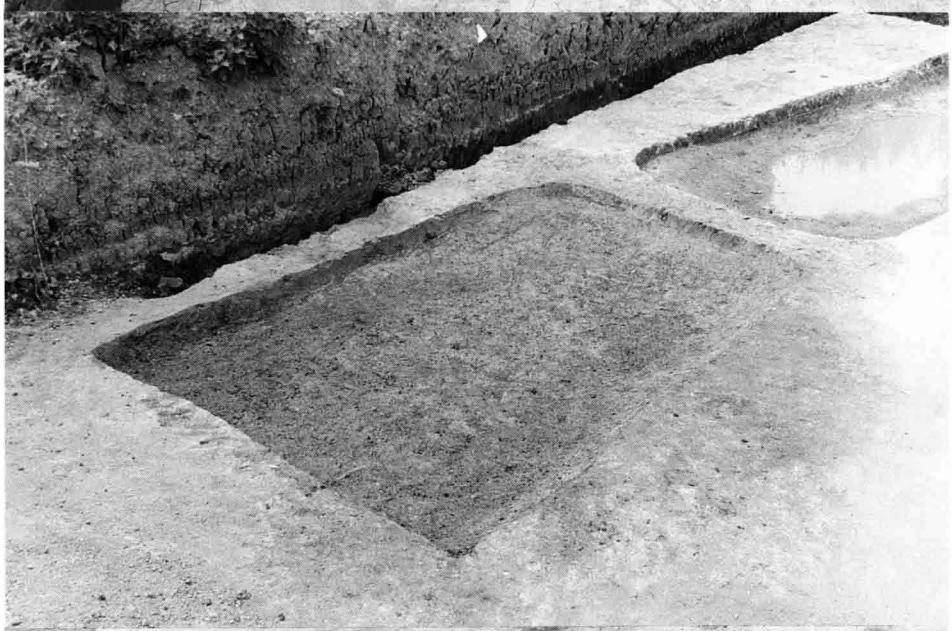


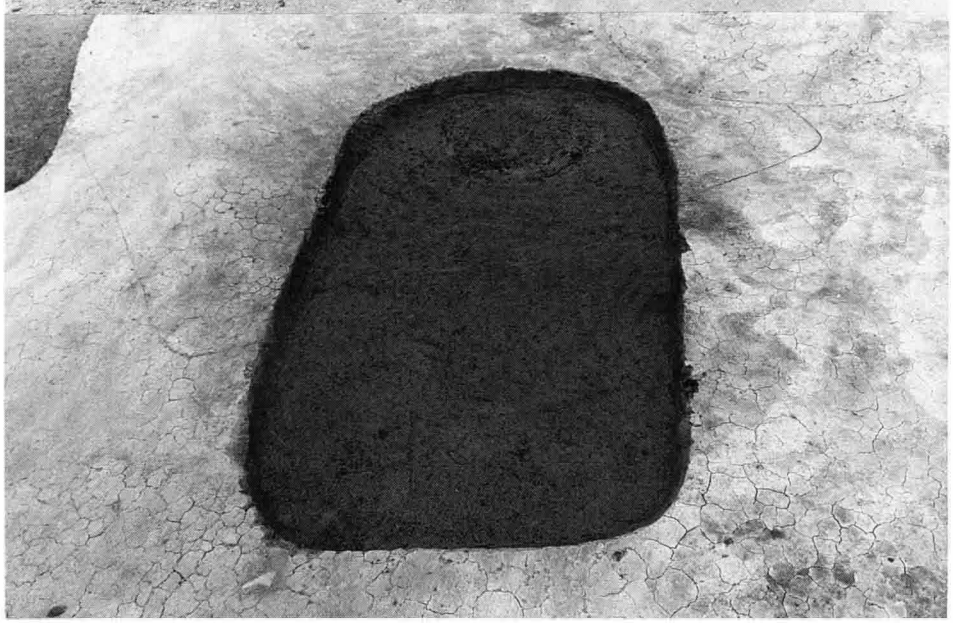
図21　2号土坑出土土器拓影

1号・2号土坑

3号土坑



4号土坑



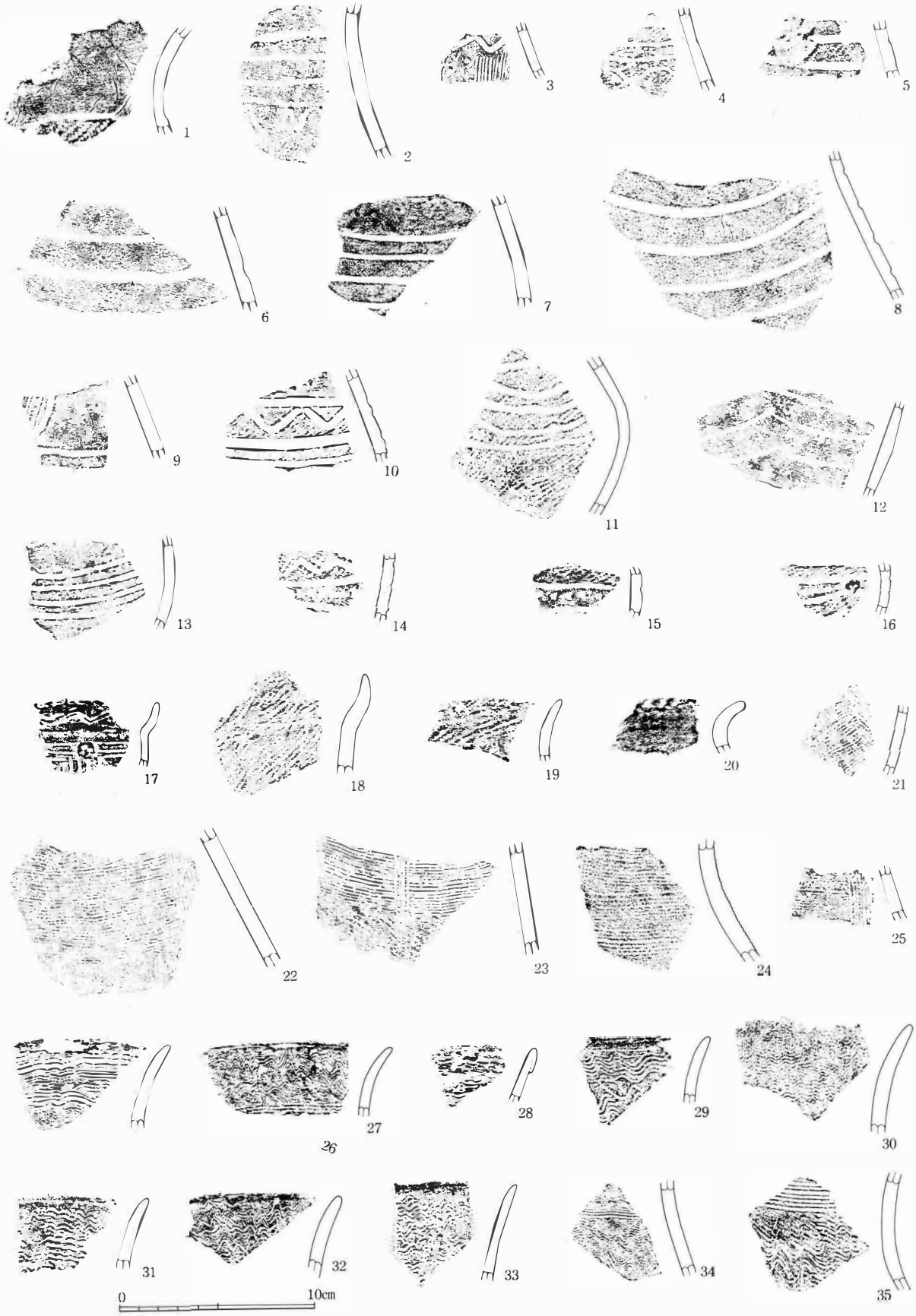


図22　遺構外出土土器拓影

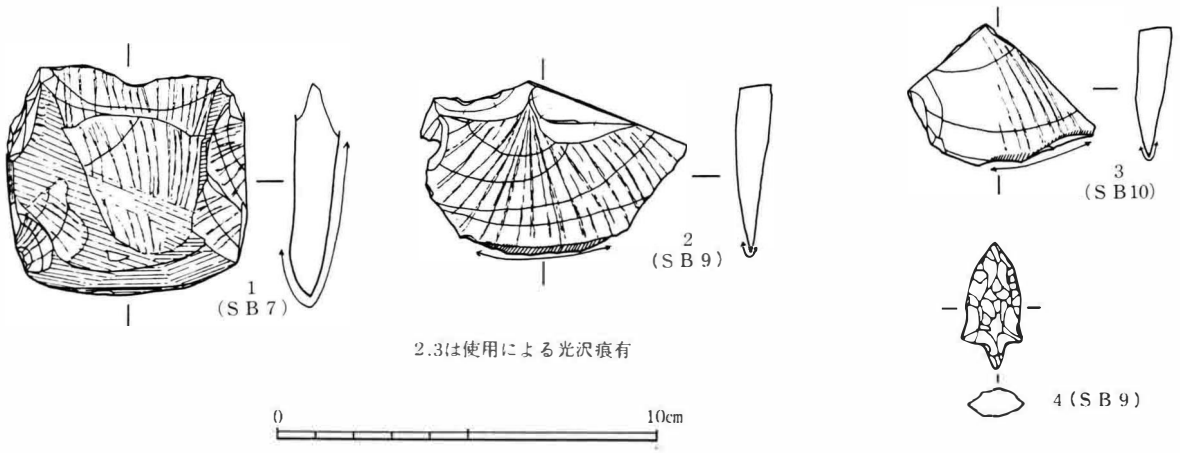


図23　出土石器実測図

第4章　総　　括

今回の調査ではその調査面積は約400㎡におよび、弥生時代中期から古墳時代後期にわたる多数の遺構・遺物を検出した。以下調査所見から遺跡の性格を瞥見し、調査の総括とする。

遺跡の範囲については未だ明確に確定し難いが、少なくとも今回の調査により中俣遺跡の範囲が従来の認識よりさらに北東方向へ延長することが確認された。ただし前回の調査所見からすれば、周辺の旧地形には非常に複雑な変化が認められ、遺跡推定範囲内に連綿と集落が展開するのではなく、自然堤防上に形成された微高地上に拠点となる集落が複数箇所形成されることによって広大な遺跡群が結果として構成されたものととらえられる。

今回の調査では明確なもので古墳時代後期住居址１軒、弥生時代後期住居址３軒を検出している。古墳時代後期住居址の１号住居址は、覆土内からではあるがかなり一括性の高い土器群を出土している。特に有段口縁坏などは従来善光寺平にては類例の少ないものであり、近年提唱されている善光寺平型坏の問題とも関連して、在地における古墳時代後期土器群の構造を追求するうえで重要な資料となろう。また前回の区画整理事業に伴う調査においてはこの時期の遺構は確認されていない。付近に存在する水内坐一元神社遺跡などの同時期集落とは別の集落が本調査地周辺に展開していたことが明らかになり、当該期の集落群の展開を考慮するうえでも興味ある問題といえよう。

弥生時代住居址３軒はいずれも後期箱清水式期の住居址である。中期栗林式期の遺物は出土を見たが明確な遺構は確認するに至らなかった。前回調査のＢ５区での所見よりすればやはりＢ区にて検出された中期集落や後期集落とは別の集落が本調査地周辺に展開する可能性が高いものといえよう。各時期において、広範な自然堤防上に展開した集落群がそれぞれ有機的な関連を保ちつつ、発展していった経過が読み取れよう。

今回の調査では両者の中間期である吉田式期の遺構遺物は確認されなかった。この傾向は前回の調査にても同様であり、本遺跡の集落は吉田式期に一次衰退する。その点浅川扇状地遺跡群とは対称的であり、各時期における生産構造の差異等根本的な問題から追及する必要性が痛感される。

以上調査所見から本遺跡の性格について若干の考察を試みた。前回の調査成果に加えより中俣遺跡の性格が明らかになったとは言え、想定される遺跡範囲からすれば未だそのごく一部に試掘坑を設定したにすぎない。本遺跡の考古学的究明はすべて今後の課題である。

最後に本遺跡の調査から整理・報告書作成に至るまでご指導・ご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げ、調査の総括としたい。

長野市の埋蔵文化財第48集

小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅱ

平成４年３月20日　印刷
平成４年３月27日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　長野市埋蔵文化財センター

印　刷　奥山印刷工業株式会社